様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：　13201
研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2009～2012
課題番号：　２１５３０９２２

研究課題名（和文）　反省的実践家としての家庭科教師の育成に関する理論的・臨床的研究

研究課題名（英文）　A theoretical and empirical study on developing home economics teachers as a critical reflective practitioner

研究代表者
磯崎　尚子　（ISOZAKI TAKAKO）
富山大学・人間発達科学部・教授
研究者番号：　70263655

研究成果の概要（和文）：本研究は、反省的実践家としての家庭科教師を育成するための方略について検討することを主な目的とした。理論的研究の結果として、生涯にわたる教師としての専門的成長の視座から教員養成教育を位置づけ、日本の教師文化としての授業研究を一つの探究の技法として取り入れることが、家庭科教師の育成に重要であることが明らかとなった。他方、実証的研究の結果として、小学校の教師が有する家庭科教育に関する教師知識は、初任教師と熟練教師ではその量的、質的に違いがあり、熟練教師の教師知識は構造化されていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to investigate of strategies for developing home economics teachers as a model of critical reflective practitioner. As a result of theoretical research, there are some key points to develop home economics teachers as a model of critical reflective practitioner or good teacher; pre-service teacher training should be designed an introductory phase of continuing professional development, and lesson study as one of Japanese teacher's culture should be engaged in both pre- and in- service teacher training as a form of pedagogy of investigation. On the other hand as a result of empirical research, there are some differences of qualitative and quantitative teachers' knowledge of home economics for elementary school teaching between experienced teachers and novice teachers, and teachers' knowledge of experienced teachers have been networked or layer-structured effectively rather than novice teachers'.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：　家庭科教育

１．研究開始当初の背景

1980 年代以降、教師に関する研究として教師知識や教師モデルが提唱され、わが国においてもその理論的研究や実践が試行され始めていた。しかしながら、このような研究は現職教育が主とされ、教員養成教育段階に

おける適応や、生涯にわたる教師としての専門的成長の視座からの研究はあまり盛んとは言い難かった。加えて、一般教育学や一部の教科教育学では、このような研究が進み実践も試みられていたけれども、家庭科教育に関してはまだ散見できなかった。具体的に教員養成教育のモデル・コア・カリキュラムも構想され始めていたけれども、家庭科教育に関しては未だ十分な構想が練られているとは言い難い状況であった。

２．研究の目的

本研究は、理論的研究（教育史学的・比較教育学的研究）と臨床的・実証的研究を基盤として、小学校から高等学校までの家庭科教師の養成教育と現職教育（以後、両者を併せて教師教育）について、生涯にわたる教職開発（教師の専門的成長）の視座から、授業分析力と教材化の知識を兼ね備えたひとつの教師モデルである反省的実践家としての家庭科教師養成と研修のための方略（教師教育カリキュラム）を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、理論的研究と実証的研究の両側面から行った。

理論的研究に関しては、養成・採用・研修の連続性、別の言い方をすれば、生涯にわたる教師としての専門的成長の視座から、1980年代以降に提唱されてきた反省的実践家の教師像に関して批判的に検討するとともに、教師の有する教師知識に関するこれまでの知見を批判的に検討した。加えて、教師の専門的成長を促す授業研究について、その歴史や教師文化としての意義について検討した。

実証的研究として、小学校の教職経験5年未満の教師（本研究では便宜上初任教師とする）、教職経験20年以上の教師（本研究では便宜上熟練教師とする）、及び小学校教員志望の大学生に対して、オンラインモニタリング調査を行い、発話プロトコルを分析し、教師知識の量的、質的検討を行った。また、小学校教員志望の学生に対し、教育実習を通した成長と意識変容について、教育実習の前後でアンケート調査を行い、統計的処理などを行い分析した。

以上の理論的研究と実証的研究に平行して、両研究で得られている知見などを参考にしながら、小学校と中学校の教師を対象とし、教師知識を向上させるための家庭科に関する教材開発及び授業構想を行い、授業実践を通してその教材の効果について検証した。

４．研究成果

（１）教師像と生涯にわたる教師としての専門的成長に関する理論的研究

ショーン（D. Shön）(1983)により提唱された反省的実践家としての教師像に関するこれまでの理論的、実践的研究に関して、今日的な意味を分析した。その結果、反省的実践家の教師像は「良き教師(good teacher)」になるための十分な条件ではないとされていること、ショーンの反省的実践家の教師像はモデルとしては評価されながらも、特に批判的にとらえられる点は、専門職としての教職が他の専門職とは必ずしも同じではなくそのモデルを教師に的確に適応することが容易ではないこと、イギリスの教員養成教育を調査すると、単なる反省的実践家という表記よりも、「批判的（あるいは鑑識眼のある）反省的実践家」を育成することが求められていること、などが明らかとなった。

また、良き教師とは何であるかを検討した。その結果、反省的実践家は自己の専門職としての成長を基盤としているのに対して、良き教師はブラックボックス化した授業における子どもの学びに焦点化しており、それ故に授業の文脈における自己と学習者との関わりに基盤をおいていること、に違いがあることが明らかとなった。

次に、ショーマン（L. Shulman）(1986)による教師知識の研究の先行研究について検討した。とりわけ、授業を想定した教材化のための知識（Pedagogical Content Knowledge : PCK）に関し、これまでのわが国の研究では、教員養成教育や現職教育において、一般教育学的知識を重視するか、教授内容学的知識を重視するか、といった二律背反的な考え方であったけれども、この PCK はそれらを繋ぐ、教師知識の中で最も重要となる知識であり、これに最も関係する教科教育が教員養成教育や現職教育の研修においてその役割がより重要であることが示唆された。

ところで、反省的実践家の教師像や教師知識に関しては、わが国は現職教育が中心に検討されてきている。しかしながら、欧米諸国では、生涯にわたる教師としての専門的成長（continuing professional development）の視座から、教員養成段階がその導入として位置づけられており、例えば、イギリスでは教員の資質・能力などの段階に応じて教員資格が区分されている。そのため、目指すべき教師像や教師知識に関しては、教員養成段階から意識され教育が行われている。わが国の研究においても、この視座から教員養成教育のあり方や現職教育が論じられることが必要であることが明らかとなった。

（２）教師の専門的成長と授業研究に関する理論的研究

教師の成長に関する一つの方法として、授業研究に焦点化して、その歴史、今日的な特色などについて分析し、専門職としての教職

における授業研究の意義について考察した。

その結果、授業研究は教師の実践と子どもの学びの一つの探究の技法であること、教師の同僚性が重視される教師コミュニティーにおける組み込まれた行為であること、教師文化を形成していること、とかく現職教育において授業研究の効果が指摘されているけれども、教員養成教育において授業研究の文化の基盤が醸成されること、などを明らかにした。

つまり、授業研究は、まず、初任教師といえども教師コミュニティーにおける帰属意識と同僚性を醸成し、自己の成長と子どもの学びを明らかにする一つの有効な探究の技法であること、次に、学校における日常的な文脈において進行している他の教育活動と一貫性がある、伝統的な教師文化を形成していること、そして、教員養成教育における教育実習で実施される授業研究もその教師文化への基盤づくりになっていること、などを指摘した。

（3）小学校教師の家庭科授業における教師知識に関する実証的研究

上述の理論的研究を基盤として、平成 23 年度から 24 年度にかけて、小学校の初任教師による家庭科の授業（5 年生）1 時間分をビデオ撮影し、教職経験 5 年未満の初任教師 3 名、教職経験 20 年以上の熟練教師 3 名、小学校教員志望の大学 2 年生（3 週間の教育実習経験済み）3 名に対して、オンラインモニタリング調査を実施し、発話プロトコル分析を通して、教師知識の実態について分析をした。その際、発話量及び発話内容（質的）をショーマンの教師知識を参考にして分類し、3 者間での違いを検討した。また、質的な違いを発話プロトコルの内容から読み取った。

その結果、熟練教師の特色として、初任教師と比較すると有している教師知識の量が多いこと、有している知識が構造化されていること、授業を構想する際には、教材を中心とした学習の流れではなく学習者の性格や発達段階、特徴的な子どもの振る舞いなどを十分に考慮していること、学習指導要領などに基づき授業の目標やねらいがより明確化されていること、目標到達とそのための授業方略が一致していること、小学校の家庭科カリキュラム全体を把握し、教える単元の位置づけを明確化していること、などが明らかとなった。それに対して初任教師は、獲得した知識が十分に構造化されておらず、知識が未ネットワーク化の状態で授業を構想する傾向があること、学習者の性格を十分に把握できず授業を構想すること、小学校のカリキュラム全体における教える単元の位置づけが明確にはなされていないこと、などが明らかとなった。

また、学生から初任教師への教師知識の量的・質的変容と初任教師から熟練教師への知識の量的・質的変容を見ると、教師知識によっては学生から初任教師への量的・質的変容が大きいことが明らかとなった。

つまり、教育実習後の大学での教員養成教育と初任者研修のあり方が重要であることが明らかとなった。また、このような初任教師と熟練教師の有する教師知識の量的、質的な違いは、小学校の理科授業を対象とした研究からも確認することができた。

（4）教育実習の効果に関する実証的研究

小学校教員志望の大学 2 年生 43 名に対して、教育実習（3 週間）前後における意識変容を分析し、教育実習における学生の成長とその要因を明らかにする目的でアンケート調査を実施した。質問項目及び方法は林他（2011）に基づき行った。質問項目は全 20 項目を設定し、統計的処理などを行い量的変容ついて検討した。また、事前事後両方の調査用紙に自由記述項目を設定し、KJ 法により質的な変容の分析も行った。

その結果、事前調査で「自信がある」項目は、「子どもとのコミュニケーション・会話」、「他の実習生との関わり方」が多く、「自信がない」項目は、「授業での発問」、「指導案の書き方」、「教科内容の知識」などであった。つまり、教育実習前では、子どもや他者とのコミュニケーションに自信があり、授業に関して自信がないことが明らかとなった。実習後の結果を分析すると、「自信がついたこと」では子どもとのコミュニケーションの取り方など学習者の性格を把握することができるようになった大学生がいる反面、子どもの指導に困難を感じた大学生もおり、教育実習を通して教育実習生の意識の変容が二つの方向に分かれた。また、「課題となったこと」では、事前調査と同じく授業に関し、特に発問の難しさや教材研究の不足は依然課題として認識していることが明らかとなった。この他に、教職に対する心構えでは、事前調査では教職という職業意識に対する心構えを指摘している大学生もいたが、事後調査では教師としての人間性に対する心構えを指摘する学生もいた。また、教材に関しても、事前調査では素材研究を重視し学習者を十分に意識していない教材研究の考え方が認められたが、事後調査では子どもの意欲をかき立てる教材研究など、学習者の視点が教材研究に加わるような意識が認められた。子どもとの関わりでは、事前調査では子どもへの対処法を学びたいということを指摘していたが、事後調査では子どもを理解することが重要であるとする考えも認められた。

本調査では、教育実習後のみの調査項目として、目標やめあてを意識して実習に取り組んだ程度、教育実習校における指導教員の指

導やアドバイスの有効性などについて設問を行った。その結果、目標やめあてを意識して教育実習に取り組むことがその達成に重要であること、教育実習校の指導教員の指導の中でも板書・発問など具体的な指導技術に関するものが、大学生が小学校の教壇に立つ自信の高まりにつながっていること、などが明らかとなった。

（５）初等中等教育の連携を視野にした教材開発

教職経験 10 年以下の教師を対象とし、教材化の知識の育成を目指し、家庭科教育の初等中等教育の連携を視野に入れた教材開発（家庭科におけるキャリア教育のための未来予想図づくり、身近な消費生活と環境を意図したエコバッグ、エコクッキング、リンゴの皮むき）を行い、授業実践を行いその効果を検証した。

小学校の家庭科の授業（リンゴの皮むき）では、教職経験が長い熟練教師でも子どもに習得させにくい学習内容やスキルを取り上げ、熟練教師の有する教師知識やスキルを意識して重点的に活用することを意図した授業を構想し、初任教師による授業実践を行った。その結果、家庭科教育における初等中等教育の連携を意識し当該教材の位置づけを明らかにして単元構成を考え、学習者の性格などを十分に把握し、到達目標などを明確に学習者に提示することにより、初任教師でも熟練教師でも習得させにくい学習内容を効率的に習得させることが可能であることが明らかとなった。

また、中学校家庭科の初任教師に対して、家庭科教育の新規の学習分野である身近な消費生活と環境を取り上げ、教材化の方法を理解し、生徒の意識変容を意図した教材開発及び授業実践を行った。その結果、教師が到達目標を明確化した教材（エコバッグやエコクッキング）のねらいや開発意図などを理解し、学習者の性格などを把握すれば、初任教師であっても新しい学習内容の指導が十分に可能であることが明らかとなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①中田晋介・磯崎哲夫・中條和光、「小学校理科教師の理科の授業で使用する知識に関する研究－熟練教師と初任教師の比較を通して－」、『科学教育研究』、査読有り、第 36 巻第 1 号、pp.27-37，2012.

②磯崎尚子、「イギリスの初等学校におけるフード・テクノロジー」、『富山大学人間発達科学部紀要』、査読無し、第 6 巻第 1 号、pp. 39-47、2011.

③Takako ISOZAKI・Tetsuo ISOZAKI、Why do teachers as a profession engage in lesson study as an essential part of their continuing professional development in Japan?、*International Journal of Curriculum Development and Practice*、査読あり、Vol. 13、No. 1、pp.31-40、2011.

〔学会発表〕（計２件）

①中田晋介・磯崎哲夫、小学校の教師知識に関する実証的研究－理科を中心として－、日本教育学会第 69 回大会、広島大学、2010.

②Tetsuo ISOZAKI・Takako ISOZAKI、How do Japanese Teachers Examine and Improve Their Teaching?：The Case of *jyugyoukenkyuu*（Lesson Study）、The 10th International Conference on Education Research、Seoul National University、South Korea、2009.

〔図書〕（計３件）

①磯崎尚子、「ライフ・キャリアと自立」、荒井紀子編著、『新版生活主体をはぐくむ探究する力をつける家庭科』、ドメス出版、全 286 頁（担当：pp.79－82）、2013.

②磯崎尚子、「家庭科の授業づくりの視点と方法－生活をよりよくする子どもの学びを考える－」、富山大学教科教育学研究会編著、『小学校教科教育論－授業づくりの視点と方法－』、富山大学出版会、全 164 頁：（担当：pp.142-164）、2009.

③磯崎尚子・山崎陽江、「自分らしい主体的な生き方を考える　未来予想図づくり」、磯崎尚子、「生活をみつめ、想像することを取り入れた衣生活の授業－実践批評」、北陸家庭科授業実践研究会編,『子どもの思考をはぐくむ家庭科の授業』, 教育図書、全 143 頁（担当：pp. 24-32、pp. 50-52 頁）、2009.

６．研究組織

(1)研究代表者

磯崎　尚子（ISOZAKI TAKAKO）

富山大学・人間発達科学部・教授

研究者番号：70263655

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

磯崎　哲夫（ISOZAKI TETSUO）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90243534